

## 石川県志賀町より

「最大震度7を記録 石川県志賀町富来」

昨年の1月2日の新聞の見出しです。能登半島を襲った大震災は、1年経った今も、地元の方々の自由を奪っています。

令和7年1月8日 石川県の志賀(しか)町立富来(とぎ)中学校

教頭 芳野 了俊 先生をお迎えし、

『復興を目指して』

と題して、ご講演いただきました。芳野先生は被災時には志賀町教育委員会に勤務しており、直後は全ての町立学校の再開に向けて奔走しました。令和6年4月1日より、現任校に赴任し、続く復興の陣頭指揮を執っております。清瀬市は3学期始めを“命の教育”週間と位置付けています。命の教育として、能登半島地震のお話を直接お聞きすることができました。



令和6年1月3日の志賀町  
中日新聞 HPより

新聞報道では最大震度7のことを取りざたされていますが、震度4以上の地震が13回、翌日以降は携帯のアラ

ートが断続的に音を響かせます。その後も余震は続き、大地が揺れる度に「ゴー」という怒号が響くのです。建物・大地の崩壊、目に飛



び込んでくる富来の街ばかりか、目に見えないモノまでが人々に悲しみと恐怖を与え続けているのです。

避難所の生活は不自由を強いられます。水が出ない、水が出ない故トイレは汚物で飽和し、プライベートスペースが確保されず、赤ちゃんのミルクは、ペットは共に避難生活できるのか・・・。

それでも、たくさんの方が一致団結し、壊れた屋根瓦を外し、倒れたものをもどし、食料を配り、水を運び、ご飯を作り、掃除をして、小さな子の相手をして遊び・・・。

学校を止めるわけにはいきません。1月3日に安否確認のメール配信、5日には志賀町内全児童生徒の無事を確認できました。10日には業者による一部施設の使用可能が確認されました。被害の大きい富来小が21日、富来中の2階に引っ越し。道路は波打ちひび割れるものの、23日にはスクールバスの試走。25日に再開にこぎつけました。3年生は受験を目前に控えていました。担任の先生方は努めて前向きな声かけをしました。

「明確な目標があれば、どんな困難に襲われようと前向きになり、立ち上がることができる!!」

清瀬中の生徒からの質問について富来中の生徒さんによる回答を交えながら説明なされました。もしもの時に備え、避難場所、避難ルート、有事においても確保できる水の所在等を確認すべきである。防災バッグ・防災用品の用意、何より、冷静に行動する練習をすべきであると。さらに生徒さんの作文をご紹介いただきました。

～前略～ これまでに感じたことのない強い揺れに、私の頭は真っ白になり、幼いころから見慣れて大好きだった富来の風景が一瞬にして変わってしまいました。～略～ 私の父は役場の職員として、地震発生直後から避難所での支援活動に追われてきました。～略～ 私が父と顔を見合わせ、再会できたのは地震発生から3日後。疲労困憊の父は一睡もせずに仕事を続けており、目の前にいるのが信じられないほどやつれていました。～略～ そんな父の姿を見て私は自分も何か行動しなければならないと強く感じました。～略～ 震災は、私たちの故郷の風景を一瞬で変え当たり前だと思っていたものがたくさん失われました。今回の震災は辛いことが多かったけれどその中で得られた学びや経験も少なくありません。～略～ 誰かの役に立つ喜びを忘れず、これからも成長していきたいと思います。

町役場に勤務する方々も被災者です。自身も被災者でありながら他の被災者のために力を尽くしました。その姿に「自分も誰かのために」と彼女は動き出しました。彼女だけではありません。避難している人々の中で看護資格をもつ方が、避難者の体調を聞き取り、体操を企画して心身のケアをしたのだそうです。富来中の吹奏楽部は、避難所を訪問し、ミニコンサートを開催し被災者を励ました。皆、被災者なのに、皆、苦しいのに懸命に支えあう姿に胸打たれました。そして、いつ起きてもおかしくない災害へ向き合うための強い魂を教授いただきました。

芳野先生は結びに「学校生活では当たり前のことができていません。しかし生徒は本当に頑張っています。授業で、行事で、部活で!清瀬中の生徒の皆さんには、被災した能登の中学生に思いを寄せていただければ幸いです。そして、助けられる人から助ける人へとならねばならないのです。」共助の心を伝えていただきました。

志賀町の皆さんは、復興のために懸命に取り組み、懸命に支え合い、一所懸命です。清瀬中にできることは限られますが、思いを寄せ、懸命に考えていきます。志賀町のみなさんと清瀬中是一緒懸命です。

やがて、『一笑懸命』となる未来に向かって。